

般若哲學への序説

市川 白 弦

一

飽びむ論理に。いびつな經驗のかけらあつめよせ。さびれたる想念のたき火をするのである。おほつかなき悩はづかし。もえなづむ燼ほりにもむせばるゝ。かくてはなんぢ。ミほく遠きおもひでにもなれミ。いまは月かけある人生の路傍に。閃々ミ蒼みゆく。紙の石塔をぞ置く。

哲學はそれが主張である限りその全ては一つの措定ミされ得る。そはその故に涯なき辯證を約束する。盡きぬ望みミ勵みをもてそは窮みなく遷りまた晋むであらう。そこにこの學の意義特質があるのだがさればこそ無窮に果を招く即ち輪廻の學。究竟の統一はかくてしばしば辯證の始原に「實體」の陰影を或は遙か時の彼方に蒼ざめし「理念」の白帆を掠めた。歴史は哲學、哲學は歴史。それは伸展のうた、さはあれ流轉のしらべ。

いま般若の學はだが主張ではない。渾一的實體から明け初める形而上學、知識の先驗的仕組を辿る認識論そして認識の客観性を否む虚無思想なきではあらぬ。事實ならぬ表現、從て主張にはあらぬ示唆、けにいちづに示唆の學。なぜこいふに、イ現實の否定、ロ思惟の否定(否定の否定)、ハ「智」の示現。かくてあらゆるダイアレクティクは示唆の彼方に消えゆく。さあれそは何を何へいかに指すか。左様に「問ふこ」へあなたを。あなたに一つも教へぬ。「問ふこ」を直指し「示

唆する「こ」へ指す。「般若波羅密十二枚、コレ十二入ナリ」(正法眼藏)。この示唆を般若は「空」の姿に營む。「空」はその學の基調である。だがそれは示唆としての空の學。單に主張としての空觀の説——空思想ではない。このこは徐ろに明されやう。

この學の基柢は故に示唆にはあらで示唆さるゝものに、示唆さるゝものは示唆より導かるゝのでなくその逆である。示唆さるゝものは示唆の先にはあらでそが礎をなす。否定の否定が部分否定の場合の交渉に入れば示唆の域を拓く。こゝに空哲學の位置を使命がある。されば示唆は示唆であつて示唆さるゝものではない。でも示唆は示唆にして主張ではない。教判の展望に一つの席を與へられし般若の位置は故に示唆さるゝものゝ配當ならで寧ろ夫より剝がれし示唆そのもの言ひかへれば主張化されしそが骸の席。思ふに肯ひに否む有の哲學(例へば華嚴)を否みに肯ふ空哲學とは(相破)相成して一究竟に還る。二者は本質的には即ち表現としては辯證的相關ならで隱顯の關はり而も又その故にこそおのがじゝ窓なきモナド言はゞ兩者は一つの「もの」の表裏ならで相入の表裏即ち表は宛ら裏その故に表裏を結ぶ第三者を俟たず從て俱に辯證——空假中の如き——の餘地をもたぬ。辯證の一員としての空は何程か主張化されしもの。それを斷見空解を危ぶむは示唆の主張化。崖に臨んで退くもの。

圓融説は故に法ではなく機の邊より招かれしもの本質的には宛ら贖罪あがなひ。示唆を主張化して假中の辯證に進むなぞ醉後に盃を添ふるもの。三諦には寧ろ窓なく窓なくばこそ融化する。窓あらば涯なき流轉。辯證をせば一空内の辯證言ひかへれば空へのそれであらねばならぬ。餘の二諦に就ても同じく言ひ得る。「空」「色」既に示唆、「即」に於て示唆の完了を見るにはあらず。まして「言詮」に「廢詮」を積むなぞ雪上の霜。曙光を純圓の眸に凝せば通別なきの辯證的次序は迹絶え皆お

のづから純圓であつた。精緻冷格な八教五時判なきより維摩一音教の見がいかにわが胸を搏つか。法の區分けよりも機の内省こそ願はしい。佛陀が門弟への威ご魅力は論旨の幽、宣説の秀麗にはあらで恐らく信の力、人格の空氣、けに「人」の言葉、一音にあらすして何ぞ。示唆を根基もとに還し一々に即空即假即中を見る。かゝる成語すらあるべきでなかつた。空哲學は内に本質的にはごんな圓融論に俟つ契機をも含まぬ。もうもろの辯證の芽生え、それは法そのもの、ではなく機の別に據るが故に。思へば般若後の大乘學は貴きそらごご。更には般若そのものすらも。

では示唆としての空哲學は何を語るのか。その反覆をやめよ。示唆の學は肯ひ語らで拒み命ずる。學べこいはず從へこいふ。旗を挽き鼓を奪ひ「來れ」はなつ。「何處へ」問ふな。そは從ふてのみ知られる。だが知つてのみ從はれ得る。この循環の寄せぬ岸へのシグナルにもごなほ幾重の循環すなはに漁るこの歩みも故にたゞ示唆であれ。

既に主張にあらねば般若のめざすは事實ではない經驗ではない。それらの奥底をなしてそれらの彼岸にあるもの、實踐ないし諦認である。だが實踐といひ諦認といふ俱にたゞ示唆の意味。イ文字般若、ロ觀照般若、ハ實相般若ごはこの學の示唆の方向を指すもの。そはされば人智に盛らるゝ體系ならで佛智に根ざす學嚴しくは法自らの名乗り。「文字般若これ性海の智印」(心經疏)。故にそは獨り理性の論理 Human logic にはあらで寧ろ諦認の論理 Divine logic の底に叫かう。彼は矛盾律の汀に喘ぎ此は矛盾に顯はれ矛盾に羽搏つ。ごごに Dialectic と Mysticism との別がある。般若は無論後者である。かゝる論理は般若に於て三つの範疇——ごはいへ自らその殻を破る即ち示唆としての——を見た。「空」(無)「即」及び「色」(有)である。空哲學はかくてまた「即」の哲學いな空なればこそ即、即ならぬ空はその限り有であり物であるから。Nihilism は寧ろ部分否定である。ごごに Nihilism と Intuitionism との別がある。般若は無論後者である。

單に否むのみならず否定をも否むに於て直觀説の旣は照る。有にも住せず無にも居らぬこはいづこにも居らぬこにはあらず。そは却つて不住に居るもの。眞に居らぬものは居つて(即)居らぬ(空)ものさればこそ眞に居る。さもなくば居るにあらず縛せらるゝもの。否定の否定は不住二邊即ち中道實相の諦認であつた。こゝにその根據に關してNegative theology と Positive theology との別がある。般若は無論後者である。從てそは超驗者への仰望にはあらで實在の諦認。dauben ならで erleben。こゝにその態度に關して Idealistic 〓 Realistic との別がある。般若は無論後者である。さあれ萬有の該擲が究竟こにはあらず。創造以前に非根據の眞空を見よこ。そは住不住をすら超へる。これぞ Pantheism 〓 狹義の Mysticism とのけじめ。般若は無論後者である。

示唆の空は故に對象の内實に及ぶ改變にはあらで態度への即ち認識態度のコペルニクスの轉舵そは却て對象への直き隨順從て「本有」の最深肯定。之をしも否めば懷疑説にされる。空は故に撥無ならで止揚從て般若に五蘊等無きにあらず。「身に非ざる是を大身と名づく」(金剛經)。空の五蘊、無の六識、無の色聲あり、新らしくは純粹視覺純粹聽覺なきなど。目無くして見、耳無くして聽く。描くや筆と畫布を彈するや手に耳を失ふ。否はじめより失ふべきものもない。「五蘊ハ色受想行識ナリ。五枚ノ般若ナリ。マタ四枚ノ般若、ヨソツネニオコナハル、行住坐臥」(正法眼藏)。空哲學に於て有は眞に有であり得る。こゝに否定に由る Nirvāṇa (シヨウベンハウエル) と覺照に由る Vimukta との別がある。般若は無論後者である。

そしてわたしは見る、在りし日の形而上學に賓主分離のドグマを今の認識論に更に先驗後驗の溝渠と「純粹主觀」の實體論的餘燼を。空哲學は「見る」の學として賓主未發先驗以前無我の淵に抜け顧みる。この時集ひいみじき奉仕を營むは即

ち「空」に「即」の範疇。この二者を通して以上の構圖に實を盛らう。心經を所依として。

二

般若哲學の礎柢は消極的(又は内容的)に空、積極的(又は形式的)に智慧、即ち空知。それは内容的に無なる知、思惟の對象ならぬ知されば在らぬもの。在るは總て認識に於て在り意識の内容たり得るもの故に空知ではない。空知は一切の「在り」を超へる。故にまた知るものなき知即ちいかなる主觀の作用でもあらぬ。主觀と作用とはなほ思はれしものその限り内容的なる即ち「在り」のもの從て思ひ前の空知ならず却て空知よりの抽象に成る説明の原理。まして容すべきは實體の概念など思はれしドグマの。

かく言へば空知を許す前に空知への思ひが働らいてはるまいか。だが思はれし空知は空知ではない。それは示唆と主張の混同。「言教實に非ず」「賢首。「言に非ず廢詮の義」「清辨。空知はかくて主觀でもなく實體でもない。六祖はいふ、明鏡臺に非ず。

從て般若の慧に照すといふもそは何か例へば體驗に由て得られた知があり夫に由て照すのではない。得らるゝもの知らるゝものは空知ではない。「修徳の慧に非ず」「東嶺。却てそは得ること知ることを照す鏡、いな單に照すこと見ること。「照見コレ般若(正法眼藏)。見るものでも見らるゝものでもなくたゞ「見ること」。賓主合一とはなほ見られしもの、眞の直觀は自己の内に自己を映す、自らを照す光の様に。それをしも絶對主觀といはぬか。否すでにたゞ「見ること」どんな主體概念も無用有害。まして主は客に對してのみ意味をもつ、絶對主觀などおのが尾をかむくちなは。

「在り」はなべて「見る」に據るが「見る」は「在り」には據らぬ。我思ふ我在りは可能なるも我在る故我思ふは成らぬ様に。

これぞ有の學ならで空に出でし般若の訝え。が、「思ふ」は「思ふ」にして「我思ふ」ではない。思ふのみで思はれぬ純主觀はないか。そはすでに思はれし主觀。思はれぬ「主觀」をいかに經驗か。眞に直接なるはたゞ「思ふ」。この「思ふ」は示唆の意味。思はれし思ひではない。言ふこゝろは「思ひを體驗してみる」の謂。けに思ふはいかなる主觀の作用でもなくたゞ「思ふ」。般若は六識の否な空知そのものゝ主體性をすら否む。純主觀の認識論はなほ形而上學の下婢。

思はれず思ふ主なき思ひ即ち直觀なるに於て「思ふ」は「見る」なれど「見る」は必ずしも「思ふ」ではない。思ふは何程か思はるゝものへの傾きなくてはかなはぬ。空の伸展(肯定)の方向が「見る」、復歸(否定)の邊が「思ふ」即ち後者は反省的直觀にして創造的直觀ではない。業相なるも眞如ではない。だが業識の基底は本覺、そは直ぐ眞如の覺照。「思ふ」は「見る」の像、なほ「頭を天に隠す」。原人の子孫(思はれし思ひ)は原人(思ひ)に徹して造化の太行に觸れる。反省するは我ならで神、我が省みるのでなく反省が我を置く。人は神に思はれし神の似姿。個我は「據て在るもの」依他起のもの元より自性なきものをこそ涅槃さはいへ。では釋迦の正覺、基督の贖罪さは全く無意味なのか。彼の涅槃は我の流轉を止めず彼の身代りは空しき性であつた。體驗は我ののではなく彼ではないか。そはまた主觀的ではあらぬか。甲の直接經驗さこのそれこそ誰が較べ得るか。そして甲さいひこさいふ俱に思ふ見るに根ざす確かな存在ではないか。なほ「在り」は「見る」に據るこいふも例へばこの時計はあらゆる主觀の眠る間も自ら刻みゆくはづ。

これらの疑は然し主張さ示唆、事實さ諦認さの錯綜。無我は諦認に於ての無我、事實のそれではあらぬ。思惟内容たる個我的存在否定ならで「見る」に於ての我的非實在性の示唆。無我にして眞に彼を彼、我を我たらしむ。甲の經驗なきなき

こは思はれし經驗ゆえに該經驗そのものならで思はれし甲の經驗の新しき創造。思ひは思ひを超へ能はぬ。こゝに認識の涯がある。欄干共に倚るも山色不同。經驗は個人を超へ而も個性的また刹那的。まことの個性は個人ではなく經驗の從て超個人的ゆえに個性的は個人的よりも高次。一切主觀眠る間の時計は實はかく思ふこゝに於ての其時計を思ふのみ。意識を時間上に對象化する刹那、表象を殘して物自體は認識の彼岸に飛ぶ。太陽の表象は光らぬ。が、太陽の純視覚は光る。彼は幻色の似有假有、此は眞色、まことの實在。一經驗を作用的契機に於て見れば勝義無性(空)、對象的契機に見れば圓成實(色)。そして自らは空に非ず色に非ずその合一をも超へる。これ言詮の「中」になほ廢詮のその説かるゝ所以、でも言詮すでに示唆、頭上更に頭を俟たぬ。かくて示唆としての「空」に二義を見る、概念されしものへの否定を概念する、こゝ(分別)への否定を。一切空は故に一切の實在は實在の相無きこゝ故に一切の實在は對象化し得ぬこゝ從て思はれし一切の現實は眞實在に非ずこゝいふこゝ。

事實の立場を諦認のそれのけじめを見た。反省的事實の立場に於て釋迦の大覺なき言ふの無意味ならぬも首肯される。ではこの場合の「釋迦の」「基督の」なきは何を意味するか。そは「見る」「思ふ」への制約ではなく見る思ふ「への高まり」の規定。個人は「見る」に於て個人を超へて造化の渾源である。こゝに「明星」が昇つた。「桃華」が照り「擊竹」が冴えた。「錫器」が光つた。

三

思ひは「思ふ」に於て復歸でなく寧ろ開發。體驗を反省するこゝはあり得ぬ。反肯は反省するこゝに於て新しき創造かくてすべては直觀として日々新にして又新なる正念の相續、復歸も切斷もあらぬ反省は本來なきもの。「思ふ」は「見る」の一

面ミなる。かくて般若は我在りの學ならず我思ふの學ならずと「思ふ」否「見る」の學その意味にて全く新しき認識論、それは形而上學—實在の學—に先立つ。在りは見るに在り(色即是空)見るは萬づの在りに互る(空即是色)。「見る」は故にさまざまの次階をもつ。この見を内實的な所見に擇み空知こいふ。空こは對象化を拒んで「知る」への示唆、「知る」そのこ「見る」そのこ。明月蘆花君自ら看よ。

「知る」は「働らく」を考へられる。空知は然し働らきではない。「主體なき働らき」も未だ精神作用の如きもの、そはなほ空知を背景に投げられし即ち見られしもの、なほ自覺の立場。内在的者が超越的なる時働きが成立つ。されば「一般」特殊ミに何程かの隙がある。隙あればこそ動く。動くは求める所以、求めるは「一」を慕ふ所以、その姿は意志。意志に於て賓主は融一され純な働きミなる。働きは然し働かぬものを背景にのみ成る。働かぬものは單に受動的者ではない。内包的に無限の内容を超へ總てをおのが表現ミなすもの。働きならで働きを見るもの、創造を見るもの。故に意志をも否むころ、感情でもあらぬ。知情意のアプリオリの成立つ審知的空間こもいはれやう。これぞ認識礎としての空知。

この立場に還るこき一般者(理)はおのれを否み盡し直ぐ特殊(事)から特殊への關係ミなる。「無所得」の世界である。所得あるは理が残留するがゆえ。一般者は自らを否みきるこに由て特殊の相互否定を完うする。言ひかへれば「空」は一切を肯ふミ共に一切を否む。交も否み合ふこに由て特殊はその關係を純にする。「聖礙無し」といひまた「觀自在」こいはれる。「存亡互」に現じて相妨礙せず。これ依他起甚深緣起(心經略疏探要抄)。困眠飢食、帝力我に於て何かあらん。

では然し記憶はいかにして成るか。想ひ出の資料をいつこに仰ぐか。それは「思ひ」にはあまりに苛き課題。たゞ「見る」に於ては絶えず無より有を生む。それは不合理か。でも事實は易々こしてこの不合理を犯す。超矛盾の祕義である。この

事實の前にかの「潜在意識」なきいかにあはき慰めであるよ。まさに何が生れるか、將に何を爲すか、我われを識らずこいふ外はない。

「働らき」は「見る」に窮まり時は「流れ」を止め永遠の生住滅となる。かくて般若は一切を成し、また毀つ。あけほの、窈窕を夕べの寒煙に。けさ露に咲く花を、あすは爐に入れる。でもけふの花にはけふ畢生の粧ひをさせて。この心に入れば成るも永遠、毀るゝも悠久。生れしものは亡びてゆく。さあれ般若に死生はあらぬ。「老死無く老死盡無し」。死生は般若の一つの經驗もしくは表現。ゆえに生も絶對、死もまた純一。「眞生は不滅、眞滅は不生。常滅を謂ふべく常生を謂ふべし」(寶藏論)。老ひて杖をおもひ病むに藥を買ふ。柴あれば爐をかこみ米乏しきに肩をひそむ。無の四諦、無の四苦、無の無明、幽かに流れゆく魂は、水月の原にしろがねのけむりとなる。

そして般若はその子「思ふ」。「思ふ」は個我の分別ではない——に於て善を生み惡を醸しまた合理を見、不合理を創る。だが自らは善にも惡にも居らぬ、合理でも不合理でもない。「父は誰をも裁かず。裁きはすべて子に委ねたり」(ヨハネ、五)。この高みより靜觀するに淨は淨、穢は穢にあり乍ら然もほのほの不二のおもむき。善なればきて必ずしも悦ばず、惡なればきて憎みはせぬ。憎惡怨恨、李四張三すべては完相を湛へて爽かである。

哲學の對象に宗教のそれをはかくしてひきつ。哲學は哲學されし成果にあらで哲學すること思ふこと見ること。「思ふ」に「見る」に觸れる限り宗教も道德藝術もすべて哲學の一節。あらゆる低き宗教もつひに哲學にまで高みゆく。看經燒香、それは哲學である。山の蒼き花の丹き、それは哲學である。飢えに食み渴いて掬ふ、それは哲學である。君の歡びに歡び君が愛ひをわかつ、それは哲學である。まことにもろもろの生あるもの生なきもの、浩々たるもの蠢々たるもの、翔けるも

の歩むもの、遊ぶもの、匍ふもの、聲ある聲なき、丸き長き、細なる微なる森々錯落しておのがじ、哲學への旅路にある。東門。西門。南門。北門。見ゆるはず、べて般若への深き扉。敲かずんば開かれず、敲けば轉た背く。あやしくもふかみけむる碧窓のもご、哀れひえびえ喪家の小狗の如く、或はさまよひ、或はたゝすみ、或はうそぶき、なげき叫び痛み打ち技既に窮する處たゞ翻身一回して入り得べきのみ。

總てを在らしめるものとしての般若はかくてその意味に於て萬物の母 Grund (太極) といはれやう。そはされば虚無を意味しはせぬ。虚無からは何が生れ得やうぞ。また潜在を意味しはせぬ。潜在ならば顯はれざるこごもあらう、いかに豊かなるも有限の重なり。般若は無限の潜在を超へる。「本無にして今有なるに非ず。本有にして今無なるに非ず」(寶藏論)。故にかゝる空知は在るのではない。在るものは總てこのものに據る。空知そのものは創造をすら超へる。Natura creans et non creata の奥底は Natura nec creata nec creans であらねばならぬ。もはや空「知」すらいはれまい。一切の「在り」を超へ何物をも含まず何物にも染まず俟たぬ、故に何物の礎柢でもなき Ugrund (無極)。統べらるゝ一物もない。ましていづこに塵埃をひき得やうぞ。無限に統一を超へしもの、無限に調和を超へしもの、故に無限に矛盾を超へしもの。百鳥、花を獻するに路なし。せめてもつゝまじやかに「空」このみ呼ぶこそよけれ。

「空」はかくて示唆より表現に遷る。示唆の極まる處さらに翻つて示唆を見ればそは表現。表現が低き立場との關係に入ればそは示唆。示唆は低き立場に働らきかける表現の一機能。示唆の學はかくて表現の學。示唆は示唆である前(論理的に前)に表現であらねばならぬ。「示唆さるゝものは示唆の先にはあらでそが礎をなす」こはこの意味。示唆が示唆たり得るはそが表現なるがゆえ。示唆の礎柢は表現である。表現が表現の礎柢をふりかへる時にそは示唆。表現の本質は示唆で

ある。示唆の表現はかくて兩彩一養。表現の「空」が空であらねばならぬ必然に遡る時、この必然は示唆の「空」の意義成立の根據として理解される。示唆の極致は表現、表現の背後は示唆であらねばならぬ。凡そ高次の立場は次位の立場の止揚従て後者の否定を含む。表現従て示唆としての空哲學から主張としての空觀の哲學—空思想が導かれ得る。前者の立脚は諦認の表白、後者のは思惟乃至現實の否定。

さて對象なき意識(空)が自らを顯はさねばならぬ他の必然に由て對象を生む時「空知」の立場をみる。「即」はこの示現を語るもの。空と色とが即に於て高めらるゝ前、一綜合的活動「空知」が空と色とに顯はるゝ過程を思はねばならぬ。即はこの過程を語るに共にまた之を逆行させる。これぞ「即」に於ける示唆の表現の相關。

かくして空は色と別ではない。空を認めて空に泥む。空そのものに染淨はあらぬ。泥むは空ならで我。碧潭ゆるさず蒼龍の睡。みよ燦として出身の光芒あまざらを引くもの、これぞ「即」の範疇。あゝわれらいま手を額に加へて般若巖頭の白雲を看る。けにけに青山も不動、白雲おのづから往還。

般若の學はかくて認識の理説から實在の理説にかたむき、そこに「見る」「空」に「在り」「色」の交渉が紡がれゆく。

序説二「空に就て」終